
Cocktail

劉悸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cocktail

【Nコード】

N1238D

【作者名】

劉悸

【あらすじ】

ある日突然、交通事故に遭った少年。目覚めたとき、彼は記憶を失くしていた。自分は自分なのに、自分ではない。自分は自分であるという証を、ひとつずつ見つけ出していく。

序章

世界がぐるぐると回っている。

沢山の甲高い悲鳴が聞こえた。

全身に痛みが走ったかと思えば、地面に強く叩きつけられる。

体温が下がっていき、身体が冷たくなっているを感じた。

生温かい液体が、頬を伝う。

身体を動かそうとしたが、全くといっていいほど動いてくれない。

ああ、死ぬのかな。

まだまだしたいことが沢山あるのに。

こんなに呆気なく一生を終えてしまうのだろうか。

すうっと痛みがひき身体が軽くなったと同時に、意識も途絶えた。

一話

川辺で、ぼうつとしていた。

考えても考えても片付かなくて、余計に疑問が増えてしまい更に頭を悩ませることになる。

疑問の答えなんて絶対に見付からない。

自分は空っぽだからだ。

何も、持っていないから。

+ + + + +

目を開けたら、そこは病室だった。

酷く頭痛がするうえ、全身傷だらけで少しでも身体を動かすと鋭い痛みがはしる。

何故こんなところにいるのだろうか。

何故全身に怪我を負っているのだろうか。

それよりも、自分は誰なのだろうか。

疑問ばかりが溢れてくる。

考えても考えても考えても、判らない、不安だらけだ。

数え切れない疑問に胸が押しつぶされ、次には意識なく、叫んでいた。

「樹っ、起きたの?!」

誰かが、室内へ駆け込んできた。

誰だろう、知らない人間が知らない人間の名前を呼んでいる。

「落ち着いて、ね、大丈夫だから!!」

知らない人間が声をかけながら、抱き締めてきた。

それでも、意思とは関係なく本能のままに叫んでしまう。
それを何とか堪えて、必死に言葉にした。

「あ…んたっ…誰…だよっ…!!!」

その言葉を聞いて、彼女は血相を変えた。
信じられないというようにこちらを見ている。

直後、悲しそうな瞳になり、次は彼女が叫んだのだった。

+ + + +

あのとときの彼女の表情は今も脳内にちらついている。

黒河樹という少年が、数週間前、事故に遭ったらしい。

通学している高校からの帰宅途中、運悪く信号無視をした車にはねられ、病院へ搬送された。

幸いにも大した怪我はなく、数箇所打撲をした程度で済んだ。

だが、それは外傷だけの話。

事故に遭ったショックで今までの記憶が全て消えてしまったのだ。

それが、今の自分だという。

自分は数週間前まで普通に高校へ通っていた黒河樹で、今は樹ではない樹。

だがそれは数週間前までの黒河樹という者の名前で、決して自分の名前ではない。

それでも自分は樹なのだ。

鏡を見ると、そこには知らない人間の顔が映っていて、それが自分だという。

信じられないことだらけだった。

目覚めていきなり全身傷だらけのうえ、記憶喪失をしていると宣告される。

自分は自分なのに、別人だという。

目が覚めて一番に駆け込んできたのは、黒河樹の母親だった。

自分の息子が事故に遭い、助かったのに記憶がなく自分のことを忘れてしまっている。

きつと辛いだろうと思う。

しかし、辛いのは自分だって同じだ。

自分のことが判らない、周囲のことも何ひとつ判らない、不安だらけだ。

「おおつ、その少年、何だっサボリか？」

「…は？」

「んー、悩んでる顔してるな、どーした？」

道を通りかかったのだろう。

気になったのか寝転んでいる自分の顔を覗きこみ、頬をつんつんと突いてくる。

中学生くらいだろうか。

小柄な体格と低い身長で、ツインテール。

目がくりくりとしていて毛が茶色い女子、そんな印象。

「ちょっとくらい気をぬかないと、ストレスで死ぬぞー」

今の自身には、かなり気にさわる言い方だ。

そんなことはつゆ知らず、けらけらとブラックジョークを言いつばす。

相手をするのも嫌になる、そう思い知らないふりをした。

「そだ、オレンジジュースは好きですかーっ？」

「…判らない」

「あれ、自分の好みも判らないのか、じゃあ、飲め！！」

ずずいっとどうぞ。

そう言って自分で飲むつもりで買ったであろうオレンジジュースのパックを突き出してくる。

見ず知らずの人間に、変わり者だなと思う。起き上がり、そのパックを一応受け取った。

「隣座るねーっ」

言う前に座ってるじゃないか。

飲むところを見たいのか、興味津々でこちらをじっと見ている。仕方なくストローを出し、試しに飲んでみることにした。

「ん…」

「おおっ、どーよどーよ、美味しい？」

「…美味しい」

「おおおおっ、同士!!」

なんて言いながら勝手に手を引っ張り、握手される。

同士とは、オレンジジュース好き同士ということだろう。

そんな人間、この世界に何人いるんだか。

「へへっ、あたし加宮蒼、君は？」

「黒河…樹…」

「あれ、黒河樹って、確かこのまえ事故にあったうちの高校の生徒？」

同じ高校、それを聞き血の気が引くのを感じた。前までの黒河樹を知っている人物。

「もう退院したんだ」

「怪我は、大したことなかったから」

「それでさ…記憶喪失って、本当？」

一度ためてから、そう問うてきた。
びくりと身体が震えたのが判る。

「…何も覚えてないんだ、自分が誰かも判らなくて周り全員が敵に見えて、何も、何も俺にはない」

そのうえ自分は自分のはずなのに、目覚めたときから黒河樹という人間の位置づけで、その代わりのような存在でいなければならぬ。無どころか、マイナスの始まりだ。どうすれば良いのか、全く判らない。不安が多すぎて、時々どうしようもなく泣きたくなるし叫びたくなる。

「…そっか」

「あんたは、黒河樹を知ってるのか？」

「知らないよ、同じ学年らしいけど逢ったこともなかったし、現に今判らなかつたじゃん」

ずっと、パックからジュースがそろそろなくなるよと、合図があった。

いつの間にか全て飲みほしてしまったらしい。
それを聞いて蒼は嬉しそうに声を出して笑った。

「何もないって怖いよね、それに今の君の状態だともっと怖いだろうなって思う」

でもね、と蒼は続け。

「オレンジジュース美味しかったでしょ？」

「あ…ああ」

「じゃあ、君の好きなもの一個発見だ、これでゼロじゃないねっ」

不思議な感覚だった。

こんなことで、少しでも肩の荷がおりたように感じられるなんて、自分が自分である証明を、見つけた気がする。

「これからさ、一個ずつ君の好きなもの見つけていこうよ」

自分が自分だと言える為の、好きなもの探し。

あたしと一緒にね、と蒼は言った。

独りじゃないと思えたとき、不意に涙が零れそうになった。

「きっと、たくさんたくさんっ、出来るよ!!」

その笑顔は自分の暗闇に、眩しいくらいの光が、降り注いだようだった。

二話

髪を、染めた。

それは勿論、蒼に触発されたからである。

黒河樹の両親にはかなり驚かれた。

何の前ぶれもなく、急にそんな行動に出たのだから当然だろうが。自分自身もこんなことをするなんて蒼に逢うまでは思いもなかった。

+ + + +

「というか、あんた高校生なんだ、中学生かと思った」

「しつ、失礼な、ちゃんとした高校生だよ!!」

発育が遅いのか、それとももう止まってしまったのか。

きつとよく実年齢より年下に見られるタイプなのだろう。

「…どっちにしろ平日なんだけど、あんたもサボりなの?」

「あー…、お母さんが熱出しちゃってね、あたしがいないときと無理するだろうから、看病してるの」

先ほど寝ついたらしく、その間にコンビニへ行つて来たとのことだ。母親が好きないちごミルクを買うついでに、自分の好きなオレンジジュースも買ったらしい。

「それよりもいっつん!!」

「いっつん…?」

「あだ名だよあだ名っ、あたしのことは蒼で良いからさっ」

本人の承諾も得ずにあだ名というのは付けられるものなのか、疑問に思った。

きっと蒼は誰に対してもこういう態度で接しているのだろう。

相手が誰だか関係無く同じ態度で接せられるのは、良いことだと思っただ。

「まずは容姿から改造しようじゃないか!!」

「容姿…?」

「自己表現だよ、服とか髪型とか」

髪型は、いじっていなかった。

黒河樹が自分の意思で染めたのだろうが、こげ茶色の髪をしている。服装は適当にあったものを引っ張り出して着てきていた。

「それじゃあたしは帰るけど、また今度逢おうね」

「あ…ああ」

「それまでに好きなものとか出来たら今度教えて」

じゃあね、と手を振り蒼は去っていった。

嵐のような感じた。

突然現れて、たった少しの間で変化をもたらし、直ぐに去っていく。状況は全く変わっていないのに、自分の心が数分で前を向いている。蒼の背中が見えなくなるまで、その場に立っていた。

+ + + + +

「好きな、色」

鏡の前で、そう呟く。

蒼にああ言われてからというもの、こげ茶色の髪が何だか落ち着か

なくなってしまう、思い切って黒に染めてみた。
黒は、好きだ。

そう思えたのは、深夜に夜空を見たことにある。
静かで落ち着く色だと、思った。

それから青も好きだと思った。

特に群青色が、静かで見ていて落ち着ける。

きっとそんな発見、他人から見れば何でもないことだろう。

だが、自身にとってそれは違う。

好きだと思えるものが見つけられて、どれほど嬉しいか。

自分にも好きだと思えるものが出来るなんて、そんな感情があったのか。

そう思ったとき、身体が震えた。

ふと、チャイム音が鳴った。

現在は夕方、家には自分しかない。

黒河樹の母親はパートで働いているし、父親も出勤している。

そろそろ母親の方は帰ってくる頃だろう。

黒河樹には兄弟はおらず独りっ子だった。

出ようか出まいか迷うが、とりあえず出ておこうと玄関まで行き扉を開ける。

「おおつ、いっつんおひさー!!」

「え…何であんたが…」

言葉に詰まる。

そこにいたのは紛れもなく、蒼だった。

高校から帰ってきた途中なのか制服を着ている。

それに、蒼の後ろにもう一人、同じ高校の制服を着た男子生徒がいた。

金にブリーチした髪が夕日に反射している。

両耳にピアスを開けいているようで、周囲の他人から見たときの第

一印象はきつと不良、だろうと思う。

蒼の友人だろうか、それにしてもタイプが合っていないような。

「先生に御見舞いに行くから住所教えてって頼んで教えてもらったんだよ」

この前と同じテンションで喋る。

まるで生まれたばかりの、小動物だ。

「いっつん髪染めたんだねっ、似合ってるよ」

「あ…、う…ん」

少し、嬉しかった。

すぐに気づいてそう言ってくれるのは、この前の自分をちゃんと見ていてくれたからだから。

思わず頬が緩んでしまい、蒼がそれを見て楽しそうに笑う。

「あーおー、俺のこと忘れてるだろー」

「うえあっ、千晴、御免っ」

「良いけどさー、俺寂しくて死んじゃうぜー？」

「だから御免ねって！」

そんな二人のやりとりを見て、思う。

「…あんたの彼氏？」

「おおっ、そうそう良く判っ…」

「やだなー友達だよ、千晴は友達なの友達、どっからどう見たらそうなるのー？」

そこまで言うなんて本当に友達なのだろう。

これからそういう関係に発展するなど、絶対に有り得ないと言い切っているようなものだ。

何度も友達、友達と言われ軽いショックを受けたように男は肩を落としている。

「えーとね、同じクラスの相庭千晴、見た目こんなだけどすっこい良い奴なんだよ」

「見た目こんなんってそれ酷くねえ？」

「でも千晴は中身が最高だから良いじゃん」

「…蒼、やっぱ大好きだ」

「冗談はよせーっ」

ああ、漫才コンビか。

間違った解釈だが、それで納得しておく。

蒼と同じクラスということは、もしかしたら黒河樹と面識があるのかもしれない。

そう思うと、急に胸が締め付けられた。

「ってまあ紹介に与りましたとおり、相庭千晴ね、宜しくいっつん」
「…宜しく」

何故千晴が蒼と仲が良いか、判った気がする。

蒼と似たような性格をしていて、馬が合うのだろう。

二人が楽しそうにしているのを見ると、哀しくも寂しくも羨ましくもあるような、そんな感覚を覚えた。

三話

「本当はね、もう一人連れてくる予定だったんだけど、バイトで来れないって言われたんだー」

だから今度紹介するね、と微笑まれる。

取り敢えず自室まで案内した。

黒河樹は整理整頓が苦手だったのか、初めてこの部屋へ来たときは驚いた。

物がそこらじゅうに散乱し、参考書も机上で乱雑に置かれていた。どうしても落ち着かずすぐに片付けたので、ベットとミニテーブルしか置いておらず今は見違えるほど綺麗に整頓されいてる。

「いっつん部屋綺麗だなー」

「っ…」

「ん、ああ、蒼がそう呼んでるのに慣れちゃったから、俺もこう呼ばせてもらっからなっ」

浸透しているのか。

嫌ではないのだが、そう呼ばれるとどきりと反応してしまう。何故だかは判らなかった。

「それじゃあこれから第一回の会議を始めますー!!」

「か…会議？」

「そーだよっ、いっつんの為の会議ー!!」

そう言っつて、通学用鞆から一冊の大学ノートを取り出した。

その表紙にマーカーで字を書き出す。

何を書くかと思いついていれば。

「じゃーん、いつつんノートっ」

「…俺の？」

「そー、いつつんの好きなものとか嫌いなものとか一個ずつ書いてくの」

「蒼の案なんだぜ、一冊全部埋まったら、いつつん大百科になるんだってよ」

好きなものや嫌いなものをひとつずつ書き込んでいく。
自分は自分だという証。

嬉々とし、蒼は早速シャープペンシルを取り出し、ひとつ書き込んだ。

「最初はオレンジジュースだよねえ」

「だな、なあなあ、最近好きになったものとかある？」

「…黒と、青が好き」

「えええええ、何いきなり告白してんだよー!!」

「いつつん、あたしのこと好きなの?！」

「そーじゃなくて、色のー!!」

やはり二人して同じテンションの高さだ。

こんなところでいきなり告白してどうする。

だよなーと笑う千晴と、蒼は嬉しそうにノートに書き込む。

「そっか、だから髪を黒くしたんだね」

「…落ち着く、から」

「そーだな、俺も黒好きだぜ」

「だったら千晴も黒くしちゃいなよ、いつつんとコンビで」

「おお、そーするかー!!」

この盛り上がりようは何なのだろうか。
人の好きな色だけでこんなに話が弾むものなのだろうか。

「後ねー、好きな食べ物とか出来た？」

「…っ…漬物…浅漬けのが好きだ」

少し言うのを躊躇った。

漬物、しかも浅漬けが好きだなんてこんなことを言ったら馬鹿にされるかもしれない。

それを聞いてから蒼と千晴はお互い顔を見合わせ哑然としていた。
変、なのだろうか。

「あっはっは、いっつん渋いねーっ!!」

「すっげ、浅漬けが好きだなんて言うのいっつんくらいだろ!!」

「…どうせ変だとか言うんだろ」

やはり、同じなのだ。

そうやって否定ばかりする。

どうして自分を見てくれない、認めてくれない。

「違うよ」

そう考えたとき、蒼は微笑んで言った。

「変なんてあるわけないじゃん、好きなんでしょ、凄い良いと思うよ」

「俺も、いっつん惚れたわー、自分で変なんて思っちゃ駄目だっつの」

「だよねー、個性だもん」

漬物の浅漬けが好き。

今度は蒼に変わって千晴がそうノートに書き込んだ。
そして小さく、そんないつつんが好き、と。

「いつつん何かテレビ見る？」

「…見ない、好きじゃないのかもしれない」

「おお、なるほど」

そんな他愛のない会話をしながら、ノートに数個の項目が書き込まれた。

きっと自分独りではこんなに自分のことは判らなかっただろう。
それに、何度か感じたものがある。

「うあー、千晴隊員よ、いつの間にやら外は真っ暗ですよ」

「…うわ、太陽沈んでるじゃないですか蒼隊長」

「お母さん心配してるだろうな、いつつん、そろそろ帰るね」

「結構ノート埋まったしな、すげーよ」

「そうだね、いつつんこれ持っててさ何か判ったりしたらどんどん書いていくと良いよ」

自分のことが沢山判るから。

そう言って、蒼と千晴は帰って行った。

二人が帰った後の部屋は、静寂がいつもより強まったようで何か嫌だった。

数個の項目が書き込まれたノートを手に取り、目を通す。

既に一ページ目が埋まりそうな勢이었다。

こんなに、自分に好みがあつたのかと思う。

そのノートをそっと閉じて、机上に置いた。

二人と接しているとき、感じたこと。

何度も、今まで感じたことがない感情だった。

どう表現して良いか判らないが、ただこの時間が続けば良いとそう思ったのは確かだった。

もっともっと自分のことを知って、そして、そして。

少しでも良いから多く、自分という存在を認めてもらえたら。

四話

生温かい血液が、頬をつたってる。

空から容赦ない雨が体を叩きつけ、寒さが肌に突き刺さるようだ。

何で自分はこんなことをしているんだろう、そう思う。

自分だけじゃない。

他人だって生きているだけ無駄なはずなのに無様に這い蹲って、必死に足掻いている。

馬鹿らしい。

自分も回りも早く死ねば良いのに。

早く滅びれば良いのに。

体の力が抜け、目蓋が閉じかけた瞬間。

雨が、止んだ。

いや止んだのではない、自分のところだけ雨が避けている。

「大丈夫？」

傾けられた傘に柔らかい笑顔、優しい声。

不意に涙が零れそうになるかと思うほど油断してしまった。

+ + + +

「いっつん」

「…何？」

「ほんつとーに、黒好きだね」

つま先から頭まで全身真っ黒。

いや、真っ黒ではなくモノクロといったところだろう。

千晴は感心したように頷いている。

「だって、落ち着くし」

「それで似合ってるから問題ないか」

「んー」

ばかり。

もそもそと口を動かして食べているはクレープである。

今朝、何故だかしれないが千晴は学校をサボり、朝一に家を訪ねてきた。

それから拒否権なく、デートしようと言言われ、今に至る。

平日の真昼間からクレープを食べながら高校生男二人で公園のベンチに座っているなんて、端からどう見られているのだろうか。

兄弟か何かだろうか、と思う。

「ねえ、何で休んだの？」

「ああ、いっつんとの交友を深めようと俺の独断で！ー」

そんなことで休んで良いものか、義務教育ではないのに。

「授業平気？」

「うっ…そ、そんなん受けても受けなくても一緒さ、どうせ寝るか」

「胸張って言うことじゃないと思うよ」

「…いっつん、言うようになったね」

正論なので言い返すことも出来ない千晴。

以前逢ったときよりも、確実に良く喋るようになってる。

だが、それはとても喜ばしいことできつと蒼が知ったら喜ぶだろうなと思った。

「俺さ、そのうち学校行ってみようと思うんだ」

「うおっ、本当か!？」

「あんまり行きたくないけど、ちょっとくらい行ってみても、良いかなって思ってる」

「すげえ、すげえよいつつん、よっしゃ頑張ろうな!!」

このことを黒河樹の両親に告げたとき、思った通りの反応が返ってきた。

そろそろ行ったほうが良いのではないかと彼等も思っていたのだろうが、気を使って言い出せなかったに違いない。

そんな無駄な気の使い方をしなくても良いのに。

だから自分からそのことを切り出してきて、喜びとまさかそんなことがという驚きが同時に湧き上がってきたのだろう。

ただ、無理はしてないかと問われた。

「蒼にも言っとくよ、喜ぶぜっ」

「…あのさ、訊いて良い？」

「おお、俺の答えられる範囲でなら幾らでも」

「あんたと蒼って、どういうきっかけで知り合ったの？」

その問いに、千晴は笑みを絶やす。

しかしそれはほんの一瞬で、ただの見間違いかもしれない。

「見てくれがこんなんだから、蒼と一緒にいるのは変わってことが」

「変わっていくか、どうやってそんなに仲良くなったかって、思った」

「そうだな、知り合うまでは別世界の人間だったし」

「…そんなに今とは違うの？」

「うん、随分丸くなったって言われる、自分でもそう思うし」

ということとは、やはり蒼と出逢って変わったということだろうか。

丁度、クレープを完食した。

これは結構好きかもしれないと思う。

「そうだな、この話は今度にしよう、次いつつんに逢ったときのお楽しみ、な」

「…あ、嫌なら話さなくても良いんだけど」

「嫌じゃねーよ、俺に興味持ってくれてありがとよ」

それでも、話すことに抵抗があるのは確かなのだろう。

昔の自分を思いだすことが苦なのかもしれない。

目を細めて笑んだ千晴を見て、そう思った。

+ + + +

「ええーっ、ずる休みでしかもいつつんに逢いに行ってたの!？」

「ははっ、良いだらう」

帰宅直後、蒼から電話があつたと親に伝えられ、千晴は真っ先に蒼へと電話をかけた。

結局夕方まで外で過ごしてしまっていた。

今日のことを話すと、かなり非難される。

「いつつんどうだった？」

「前より色んなこと喋ってくれたぜ、それと今度学校来るって」

「うそっ!」

「ほんと、楽しみだなー」

電話越しに聞こえてくる蒼は本当に嬉しそうだった。それを聞くと千晴も自然と笑顔になってくる。

「いっつんとクレープ食ったんだけどさ、あいつ甘い物はかなり好きかもだつて」

「そうなんだ、じゃあ今度ケーキ買ってってあげよう」

「皆でケーキパーティだな」

「うん、良いねっ!!」

あの日、蒼があそこに通りかからなかったら、声をかけてくれなかったら。

自分はここにいない。

こんなに楽しい毎日を送れていない。

蒼には、本当に感謝している。

千晴は蒼と電話を通し会話をしながら、心の中で感謝した。

五話

「樹、まじで覚えてねーの…?」

歪んだ表情で、訴えてきた。
ずきりと胸が痛む。

今朝とうとう決心を決めて登校してきたのだが、高校へ近くなつてくると、自身へ生徒達の視線が集中しているのに気づいた。
事故に遭った人間が登校してきたと生徒達はどこからか耳にしたのだろう。

野次馬と化した生徒達からの視線が痛い。

正直、誰一人として見覚えのある人間はいない。

同級生達もどう声をかけて良いのか判らず迷っていて、声をかけてくる者はいなかったのだが、先ほど初めて声をかけられた。
彼は、黒河樹と良くつるんでいて仲が良かったと言う。

本当に記憶が失くなっていると本人から聞いて、動揺をかくせずにしている。

「っと…御免、名前何ていうの?」

「平澤、准だよ…」

駄目だ、やはり思い出せない。

どうしようかと焦ったのがさとられたようで、准の瞳はかなりくすんだ。

これぐらいのことはあるだろうと予測していたのに、やはり現実になるとどうしようもなくなる。

「ははっ、そっか、でも良かったよ退院出来たみたいで…」

ちつとも良かった、とは感じていない瞳でそう言った。

今までの黒河樹を奪われたようで、手放して喜べないのだろう。きつと前までの黒河樹だったならば今の状況で、准に大歓迎され喜びのあまり抱締められていただろうに。

事故に遭って、無事退院し学校へ来れたのだからそれくらい当たり前だ。

「ねえ、ちよつとそこ邪魔だよ坊ちゃん達」

突然がしり、と頭に圧力がかかる。

ふわりと鼻孔を甘い香りがついた。

自分よりもずつと背が高く、整った顔立ちで少し長めの髪が目にかかっている、制服からすると同じ高校の生徒。

随分と肝がすわっている、そんなふうに感じられる。

黒髪に金のメッシュと、そこから糸目がこちらを覗いていた。

「朝から元気だね、若者」

「えつと…、どなたですか？」

若者とか表しているが、さほど変わらない年齢じゃないのか。

周囲と違った雰囲気ですく浮いている人間だ。

思わず相手のペースにのまれそうになっってしまう。

「あれっ、怜ちゃんがいつつんに絡んでるっ!？」

「おお、いつつん来てるじゃん」

「おっはよう怜ちゃん、今日もいけいけだねー!!」

「おはよう、蒼こそ超ハイテンション、低血圧とは無縁そうで羨ましい」

一緒に登校してきたのだろう、蒼と千晴がいそいそとこちらへ向か

ってきた。

絡んできた怜という生徒と親しげである。

「いっつん、おはよう!!」

「あつ、ああ…おはよう」

「来てくれて嬉しいよつ、ねえ千晴？」

「本当にな、前よりももっと遊べんじゃん」

不思議と、独りで登校していたときの嫌気が去っていった気がした。肩に入っていた力が抜けて、安心出来たような、そんな感じ。かなり力んでいたのを自覚した。

「…いっつんて、君がいっつんだったんだ、偶然」

「そうだよつて…怜ちゃん知らないで声かけたの？」

「そうじゃなくてさ、この人と何か道の真ん中で言い合ってたから仲立ちをしよう」と

「言い合いつて…何か…あつたの？」

一度こちらのほうに視線を向けた後、准のほうを見る蒼。

大体何のことで言い合っていたのか予測がついたのだろうか、蒼は物悲しそうな表情になった。

「…悪かった、じゃあ俺行くわ」

あ、と声が出なかった。

しかし。自分に引き止める権利などあるのだろうか。

彼と過ごした時間を全て忘れてしまった彼の知っている黒河樹ではない自分に。

去り際に、准が悔しそうな表情をしているのが見え、余計その気持ち強くなった。

「…そうだ、いつつん怜ちゃんと初対面だもんね、紹介しないと！」

「どーも羽柴怜ちゃんです、趣味は人間観察、スリーサイズはトツプシークレットで、因みに彼女は年中無休で募集中、これを機会に俺と付き合おっか？」

「っ…?!」

「怜ー、いつつん怯えてるよー」

「怜ちゃん冗談は大概にしないと、いつつんに冗談は通じないんだから」

何だ冗談か。

それをして胸を撫で下ろす。

「冗談じゃないって言ったらどうする？」

「これ以上付き合うのは時間の無駄だから放置する」

「…御免、蒼、冗談だから放置しないで」

蒼も千晴も個性的だが、怜はそれを更に上回っている。

随分と変わり者なんだなあと蒼と夫婦漫才を繰り広げている怜を見てそう思った。

「このまえバイトで来れなかったって言ってたのが怜ちゃんなんだよ」

「ああ、あのときは残念だったな…でもここで出逢ったが運命だ、俺達は赤い糸でむすば…」

「よーっし、それじゃあ皆で一緒に登校しようかつー！」

「怜、お前って本当何がしたいんだか判らねーよ…」

「うん、俺も判んない」

蒼に腕を引かれ、ただ足を動かしながらも思っ。

先ほどの准の驚いた顔が脳内をちらついて、素直に前を向けない。
こうやって腕を引いてくれる人がいなければ、今この場から逃げ出
していただろうと。

高校にすらついていない、今日はまだ始まったばかりなのだ。

六話

「桜ちゃん今日も可愛いね」

「あからさまな棒読みでよくも抜け抜けと言えたもんだな、羽柴」

「冗談じゃないよ、名前が可愛いってことだから」

「お前やっぱ一回死ねよ」

「死ぬなら好物の苺に溺れて死にたいなあ、コンデンスミルクたっぷり」

何だろう、この会話。

蒼と千晴は6組で怜が1組、そして自分が2組と蒼と千晴とは教室が結構離れており、先ほどまた後でと残し、別れた。

怜とは教室が隣同士なので、何かあったら怜に助けを求めるように言われる。

それで怜が人を紹介したいということとで今この状況にあるわけだが、その紹介したい人というのは自分と同じクラスの女子生徒だった。会話を聞いている限りかなり親しいというか、互いをよく知り合っている、そんな感じがする。

「そういうことでいっつんを宜しく」

「何がそういうことだか説明しろ、超能力者じゃないんだぞあたしは」

「…桜の心の中に話しかけたら快く引き受けてくれたよ?」

「それはお前の勝手な妄想だ」

「冗談だよ冗談」

「お前が言つと全部本気に聞こえるから止める」

絶え間なく続いた会話に疲れ、桜という生徒は溜息をつき、こちらに視線を移してきた。

じつと見つめられ、その視線に体がびくりとする。

怜との会話を聞くに、彼女はかなりさばさばしている性格のようだった。

目力が少し強い所為できつめの印象を思わせる。

ショートヘアで全体的にさっぱりとした外見だ。

「黒河、あたしのこと覚えてる？」

「えっ…ご、御免、覚えてない…」

「…へえーやっぱ記憶喪失って本当だったんだ、初めて見た」

同じクラスなのだから、黒河樹のことを知っていて当たり前だ。先ほどの准のことがちらつき、身構える状態になる。

「あたし相沢桜、羽柴と小学校からの腐れ縁ってやつなんだ」

「へえ…だからそんなに仲良いのか…」

「仲が良いとかそんなんじゃないって、こいつが生意気だから…」

「生意気なのはどっちだよ」

今にも殴りかかりそうな視線で怜を睨む桜。

自分がいなかったらきつと容赦なく殴っているのだろうと思う。

「俺隣の教室にいるけど、移動教室とかのときは桜に訊いた方が早いかなんて思っで、いつくんが何かあったら頼むよ」

「判った、今度昼飯奢りな」

「了解、じゃいつくんそういうことだから、また後でな」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられる。

同年代の男にこんなことをされるなんて思ってもみなかった。

その行為に対して不機嫌な表情を見ると、怜は笑って自分の教室へ向かっていった。

「そうだなあ黒河、ちょっと話聞きたい、良い？」

「…うん、良いけど」

「おお、あんがとー」

桜に促され、教室へ足を踏み入れる。

教室前で怜と桜と話していたときから感じていたが、教室内の生徒達から視線が集中している。

言ってしまうば登校中からずっと見られているようだが。

「あんたの席はここだよ、あたしは廊下側の一番前ね」

窓側の後ろから二番目。

そこが黒河樹が使っていた席だという。

自分の席だと言われても、この学校に来たこと自体が初めてとしか感じられない自身にとってはしっくりこない。

「本っ当に何も覚えてないの？」

「うん、御免、何も覚えてない」

「あ、謝らなくて良いって、別にあんたが悪い訳じゃないんだからさ」

そう言われて、自分が知らずの内に謝っていることに気づく。

記憶を忘れてしまった、ということは自分が悪いのか。

別に自分が悪い訳ではないじゃないか。

「…苦しい顔してどした？」

「っ、何でもない…」

「うーん、じゃあさー、羽柴とはどんな風に知り合ったの？」

「加宮蒼って奴の、知り合いだったから」

「ああ、蒼のー、って蒼とはどうやって？」

突然声をかけられた。

そう答えると、桜は顔をしかめた。

そして、何かを懐かしむように笑う。

「…はっ、あいつらしいっちゃあいつらしいね」

「あいつ知ってるの？」

「まあね、蒼とは中学校から一緒だよ、ほんとーに面白い奴だよな」

「…うん」

面白い、というか変、だなあと思った。

こんなこと直接本人には言えないが、正直な感想はこうだ。

「…」

「…っ、何？」

「あ、いや、綺麗に笑うんだなーって思ったの」

「笑う…？」

「色々悩んでるみたいだから笑うことすら間々ならないのかと思うけど、そんなことなくて、良かったよ」

意識していなかった。

知らぬ内にこぼれていたのだろうか、笑うなんてこと出来るはずがなかったのに。

いつの間にか、自然と出来るようになっていたらしい。

「あたしに出来ることがあったら何でも言えよ」

それに対し、有難うと、無意識の笑顔で返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1238d/>

Cocktail

2010年10月17日03時06分発行